



I はじめに

分科会基調は、討議課題をもとに提案された。

II 報告及び質疑討論の概要

—報告1—④

多文化共生の学校づくりをめざして

(神奈川県人教)

—主な質疑と意見—

兵庫 在留資格についての知識を伝えることについて教えてほしい。

報告者 生徒にとって進路を考えるうえで在留資格についての知識は必要であるので、行政書士を招いての学習会をおこなった。またこの学習会には日本人生徒も参加可能とした。それは教員希望の生徒もいたからである。

奈良 今外国人生徒への支援をしている。子ども・教職員の変容を知りたい。

報告者 教職員は、今の支援でなくその先を考えよう、どう育てようかと意識が変わった。日本人生徒については、問かけるとたくさんのアイデアが出てくる。日本語を使わない1日をつくろうということや、多文化共生の日をつくるなど。ある生徒は「多文化共生っていいな」と言った。ある外国人生徒は、行事でみんなで共に自分の国の文化のダンスをすると決めた。しかしその行事に対する熱量が違いすぎてぶつかることもあった。でも、やり切った、素で交わったかなと感じた。

大阪 アメリカ出身の子どもがいる。言い方がストレートなので「なんでそんなこと言うの」というような意見があったが、学習を重ねていく中で知り合えるようになった。良いて誰にとっていいのか考えさせてもらった。

兵庫 親の悩みごとの裏に子どもがある。子どもが宿題をする場をつくって支援している。在日年数が長い子が短い子を支えるという居場所ではできている。しかし、高校に行けない子もいる。家庭状況、学力等いろんな理由、地域性もある。高校に入っても日本語支援をしていくことがその子の未来につながると思う。互いに距離を縮めることが大事と思う。

神奈川 個人的に学習支援をしてきた。高校へ行けずにいなくなった子もいた。全同教での報告を

聞いて自主夜間中をつくった。そこに来た生徒が高校へ進学できた。進学して高校ではどんな力をつけているか。

報告者 今いる学校での様子を報告する。様々に活躍したり、進路に向けて様々に考えている。在留資格というところではまにまに。理系進学は狭い。就職に際して企業の知識が浅いことも多く学校が伝えていくことも多い。

大阪 自分の地域で「地球村」という取組があり、その担当をしている。そこに参加した中国にルーツのある子どもが、自分の国の文化に興味関心を持ってもらっていると思えたことで、自信をもってしている。今後の取組につなげたい。

—報告2—⑤

オサムの成長

(大阪市人教)

—主な質疑と意見—

大阪 報告からは登校だけでなく下校も母が付き添っていたのではないかと感じた。そして母がともに登下校をすることができなくなったがそのころからひとりで投稿できるようになっていたのではないかと感じた。ひとりで登下校することを試みても、オサムは迷ったりどこかへ行ってしまうということもない子どもではないかと感じた。そのことから、「ひとりで登校できるか」がオサムの課題ではないかと考えたのだがどうか。

報告者 7年生の家庭訪問へ行く頃にはひとりで登下校できたと思う。しかしオサムは周りからの視線をととも気にする。「制服を着ている子どもがなぜこんな時間にいるのか。」と思われるのではないかという気持ちから「ひとりでは行きづらい」と感じていた。今、考えている進路が実現すると公共交通機関を使つての通学となる。そのことも考え、今年度2学期からは、母から「登校しました」という連絡を学校へ入れてもらって、オサムが一人で歩いて登校したり、帰りは遠まわりではあるが電車を使ったりすることを始めた。進学の際には、登下校の経路をととも確認するといったことも考えている。

熊本 報告から家庭訪問をしっかりこう積み重ねていくこの大切さを改めて感じる事ができた。文化祭の出来事においてやその後の、オサムへの周囲の子どもの関わりについて聞かせてほしい。

報告者 クラス替えがなく9年間同じ顔ぶれであることや小学校5、6年生のころから不登校傾向が強まったこともあり、オサムをあたたかく見守る空気が中学生になったあたりからできていた。また、学校には来れていなくても地域の祭りに一緒に行くなど子たちは関わっていた。子どもたちは学校内外問わず、頑張っていることも含めオサムを受け止め、オサムは安心していった。教員が子どもたちに話さなくても、子どもたちが先に動いていた。

大分 オサムが「自分は反抗期なんです」と言った頃が報告者に心を開いた変わり目だと感じた。そのあたりのことをもう少し深く聞かせてほしい。

報告者 オサムに対してはなかなか開かなかった。次第に不登校になっていく。そんな中、まずはオサムの母と話すことから始めた。オサムの家での様子、学校に対してどのようなことを求めているか等聞かせてもらった。オサムに対しては、小中一貫校であることから様々な人からオサムのことをたくさん知ることができるので、知り得たことをきっかけに関わりを深めていった。背中を押すタイミングについては迷ったが、オサムに対して開いているクラスの雰囲気と思うと今がベストだろうと考えた。オサムが自信になったと言っていることもあり、転機だったと思う。その後、オサム自身から日常の出来事など些細なことを話してくれるようになったこともあり、関係が深まったと感じるし、私自身の自信にもなった。

大阪 小中学校の単学級の人間関係づくりについて、学校の取組を聞かせてほしい。

報告者 小中学校ともに「集団づくり」に重きを置いている。学期に1、2回ほど1年から9年まで、各学年の教員が集って子どもやクラスの様子を共有し、どう集団をつくっていくか、課題を整理し取組を協議する「集団づくり委員会」がある。小中一貫校の強みの取組と感じている。

奈良 報告の中に、「介助が必要な生活環境ではなかったことから、療育手帳を取得しなかった」ということを書いた理由を聞かせてほしい。

報告者 そのときはオサムの母が仕事をしていなかったもので、自分が見れるということと、母自身がコミュニケーションをとることが苦手なことから、取得することでそのことに係るやり取りを行政の人とし続けることへのプレッシャーがあったということで取得しないことにしたと聞かせてもらったので書いた。

奈良 母が子育てに対して悩んでいること、そして社会にある差別性が隠れていることを再確認した。母が、子育てはひとりですることが当たり前と考えていたんじゃないかと思う。もっといろんな助けを借りながらやっていくことが大切と思う。それができなくなっている社会環境にあるんじゃないか。わざわざ関係機関に出向いて、話していかなければならないハードがある。母がコミュニケーションが苦手ではなくて、社会がもっとお母さんの思いを引き出せるような、そういう関わりをしていかないといけないし、地域がやっぱそうでなくてはダメだと思ったり、学校自身もそうではなかったらいけないと思う。例えば、このお母さんの学校行事のところで子どもを休ませようと思っていることは、きっと学校を含め、周りに「申し訳ない」というものが、お母さんの中にあるんじゃないかと、すごく感じる。そういう世の中で本当にいいのか、どんな人もともに生きていくとか、どんな人も自分らしく生きていくってどういうことなのか、考え直していかないといけない時代であって、自分の力で何でもしていかなければいけないというこの社会が本当に正しいのかどうか、ここは議論が必要ではないかと、

この報告で考えた。

石川 自分のかかわった生徒とオサムが重なった。
大阪 オサムを囲む子どもの姿がすばらしい。オサムがクラスに戻ってくることを待ち望んでいて、喜んでいることを素晴らしく感じた。いま私は登校支援の担当をしている。その子ら9人は、はじめはそれぞれひとりで過ごしているという姿から、「みんなですることは楽しい」や「この子らに会いたいから」等という言葉が聞こえてくるようになり、学校へ来るっていうことは人とのつながりを求めているんだろと感じるようになった。だからクラスへ入ることは大事だと思うものの、クラスとの関係性を構築できていない状況がある。そこを何とかしなければと思えた。

大阪 いま関わっている子どもと改めて向き合えなければと感じることができた。

—報告3—④

生き直し、共に生きる

(石川県人教)

—主な質疑と意見—

熊本 障がいのある子どもを隠さなければならぬと思わせ思わせていることこそが、教育の課題にあることを感じた。そして思わせているのは、私たち教員もその原因の持っているんだろということをも気づかされた。「生き直し」という言葉を使う報告者が今後どのような生き方をしたいか聞かせてほしい。

報告者 我が子に障がいがあるとわかり、ショックを受ける。その障がいを受け入れる、受け止めていくことによって、その親自身の価値観とか考え方で変わっていく、そういうことを「生き直し」と思っていた。でも最近は、障がいのある子の周りにある「バリア」「差別」「人権」とか、そういうことに気づき、向き合って、その子どもが本来が持っている人権を認識して大切にしていってという生き方そのものが「生き直し」なんじゃないかと思っている。自分ができることは声を上げていくことであり、そのことでエレベーター設置等実現してきた。いい足跡を残したい。中学校生活でも教職員との対話を大切にしながら進んでいきたいと思う。

神奈川 自主夜間中学として、いつでも学びたい人が学びたいことをするという場を週1回、開いて様々な人が集う。集う人の中にある「生きづらさ」は様々である。報告を聞いて、行動は周囲の人たちとの関わりがあったから始まったと感じたので具体的に聞きたい。

報告者 はじめは地域の学校に行くなんてとんでもないこととっていたので、私には無理、とんでもないと思っていた。しかし、ひまわり教室に通う人たちにたくさん相談に乗ってもらったり、支援してもらったりして、活動ができていると思う。

大阪 学校に要望することや宿泊行事の時はどうしているのか聞かせてほしい。

報告者 宿泊については6年生の時に初めて参加

した。5年生の時に、片道20キロほど歩く行事の際に、学校はとても心配してくれて、保護者が一緒に来ることを求めた。学校の行事に保護者が行くのはどうかと思ったのでひまわり教室の人たちに相談したところ、ひまわり教室のスタッフがボランティアで参加し支援してくれた。そのあと、学校の行事であるから学校での対応してもらいたいと、教育委員会へ、要望書を提出した。制度としては難しいが対応するといってもらった。そうすると、6年生の時はひまわり教室の方に行っていた私は一切関わることなく参加できた。来年の修学旅行も同じように対応してもらおうことになっている。

奈良 学校へ通うという当たり前のことをするのにそんなに覚悟をしなければならぬことに疑問を持った。自分は自分で何ができるのか職場のみなどとも考えていきたい。

熊本 「恥でないものを恥と感じさせる社会を変えていくのが同和教育、人権教育である」ということをこの報告から感じた。

奈良 昨年、障がいのある子どもの担任になった。あるとき、給食にゼリーが出て、ある先生が「こんなに食べられないから減らそう」と言ったらクラスのある子どもが「なんで勝手に決めるんや。本人に聞けよ」と言った。ともに育ってきた子だった。一緒に育つことの大切さを改めて感じた。また保護者と話をするとき自分が壁をつくっているなって思ったこともあり自身の内面をふり返った。

兵庫 自分の経験の中で、特別支援学校へ進学する外国籍の子どもがおり、通訳を見つけてくださいと言われ、対応したが、この報告を聞いていたら、その他の学校という選択肢も考えれたと思う。

愛媛 自分自身発達障害があり、教員として働いているが、受け入れられにくい現実があることがつらい。地域で学びたい人が学べないということが本当に私にとっては苦しいことだし、自分自身、障がいのある人としてできるだけたくさんの障がい者を受け入れていきたいのに、学校が受け入れにくいという姿勢であることは、やはりいけないなっていると感じている。

〇1 日目の総括討論

大阪 「知る」ことの大切さを改めて考えさせられた。誰かとつながるにも知ろうとすることが大事である。教員が正しいことを伝えることも大切だと考えた。自分に何ができるかを考えた時、その人のことを考えると、その人の気持ちに思いをはせる、それはできることなのかと思うので、今自分の目の前の人のことを大事にするってことは、今からできることと思う。

香川 自分の中の差別的な感情が障がいというものであって、自分の考えとか捉え方、周りの人たちとか社会の中にバリアがあるという言葉にすごく感銘を受けて心に刺さった。子どもに関わる人や、教育に関わる人に、何が求められているのかとも考えてみた。やはり子どもたちとか保護者の方、お

家の方が伝えていただいたことをきちんと受け止めて、対話を続けていくことが大切であって求められているんだなと思った。

大分 以前、子ども会の学習会に参加していた時に、ある保護者が言われた「仲間づくりが命を大切に作る」ということが忘れられなくて、そのことを踏まえて、自分の中で人権意識を高めていこうと考えている。そして、去年、一昨年と、この大会の中で、「共事者」という言葉を学ばせてもらった。新たに自分の中で、人権教育の少し広がりを持たせてもらった。それは、共に生きるってということ、想像力を身につけようということ。つまり、自分の中で関わっていかうという思いがあれば、それを出発点にしながら、一緒に考えていく仲間作りを広げていけばいいのかと感じている。実践にはまだ程遠いところもあるけど、共に考えていけるような思いを、改めて大事にしていこうと感じた。

学生 「子どもの中で子どもは育つ」ということがすごく心に響いたのと同時に、インクルーシブ教育を行っていくことの重要性について、気づくことができた。教育実習を経験して、子どもは子どもどうしの関りから育っていくと感じた。障がいや外国人等でわかる教育の中で過ごしてくると差別につながる、わけることで大人が奪ってしまう。子どもたちと一緒に関わって成長していける場を提供することの大切さをすごく感じた。たくさん課題もあると思うが、私自身も提供していけるような教員になれたらと思った。

石川 ひまわり教室で様々な手記を見てきた。当事者の声を聞くっていうのは同和教育ですと昔からももちろん言われていることだが、その「聞く」というのは、どれほどの深みで聞いているのかが大切だなと思う。

大阪 友人の子どもに障がいがあり、そのことを理由に学校をどう選ぶか相談されたことがある。このレポートを聞いて、もっと自分にできたのではないかと振り返った。

石川 始めの頃は、ひまわり教室に来る子どものお母さんたちの顔がやっぱりこわばっているというか、教室の職員に対してもそれほど信頼してないっていうお顔で来られる。だんだん顔が柔らかくなってきて、子どもたちも楽しそうに通ってくる。文集に自分たちの気持ちを深く追求して書くという経験を通して、ひまわり教室に通えるようになったんだしたら、地域の保育園に行ってみようか、保育園に行けるようになったんだしたら、地域の小学校に行ってみようかなっていうようにお母さんたち、お父さんたちの気持ちが少しずつ変化していくのが分かる。いざ地域の小学校に行こうと思った時に教育委員会という大きな壁がある。もちろん通知のはがきも支援学校か支援学級で来る。この子が20歳になった時に「誰？」って言われたくないとか、災害の時に地域で暮らしてた方がいいとか、いろんな思いがあって、地域を選択したとする。そういう思いがあると知って、お母さん、お父さんたち

を先生たちが暖かく迎えてくれたらどんなに嬉しいだろうと思うので、この機会にお願いをしようと思った。

—報告4—④

みんなでやろうや！ (大阪府人教)

—主な質疑と意見—

大阪 報告の学校で人権教育推進担当をしている。四条中では人権教育カリキュラムに沿って系統立てて人権学習を進めており、差別に気づく力を育み、自身の生き方を見つめることへとつなげている。

熊本 生徒の「みんなのために自分が苦しい思いをして、でも嫌なことをやってくれる人に」という学習の感想について、生徒の感想は様々にある中で、この報告に示した意図やこの感想に対して他の生徒はどのように返したのか聞かせてほしい。

報告者 学級通信で全員の振り返りを全員が見ることができるように共有している。そうすることでいろいろな考えがあることを知ることができる。

佐賀 Aさんがピアスをつけてきた理由を報告者の主観でいいので聞かせてほしい。また、報告者から見たAさんの「持ち味」を聞かせてほしい。

報告者 Aさんの母は「やりたいことを自分で責任が取れるならやってもよい」という考えであった。社会のルールを学ぶことも大切ではないかと今は話している。ピアスをあけていた理由はきょうだいもあけていることもあり「興味本位」ではないかと思う。Aさんの持ち味は、登校する日数が少ないにもかかわらず、登校したときにはいろいろな生徒が寄ってくることと思う。

香川 報告のあった部落問題学習について、「牛」が出てくる学習であるが、報告の中には「小学校での学習とつなげて」や、「系統立てて」という言葉が出てきていた。詳しく聞きたい。また、「かわいそう」という言葉が何度も出てくる。校内でこのことについて意見を出し合ったと思う。「かわいそう」という気持ちから差別につながることにについて考えさせたことについて詳しく聞きたい。

大阪 小学校での取組を話す。「身の回りにたくさん牛がいる」というところから始め、「いのちをいただく」ということを考える学習をしており、これが中学での学習にもつながる。また、うわさから偏見が生まれることや、多文化共生の学習をとおして価値観の違いについて考えることもしている。

報告者 様々な動画を見ていく中で、子どもたちに湧き上がってくる気持ちは「かわいそう」だと思った。そのかわいそうの基準は人によって違う。そんなところから違いを知っていければということで教材を選んだ。

熊本 生徒は「かわいそう」の他の思いがあったのではないか。自分の学校では先日、馬刺しをつくるセンターを見学した。様々な工夫で馬を余すことなく使っていくことを知り、「この人たちのおかげで美味しく食べることができるんだ」と感想を持つ子

もいた。いろいろな感想を知りたい。

報告者 「命の大切さ」「感謝の気持ちを忘れない」「ありがとう」等あたたかい感想ももちろんあった。

佐賀 Aさんについて、小学校からの引継ぎはどのようなことであったのか、またAさんはどんな姿を想像して学習を進めたのか教えてほしい。

報告者 学校を休みがちであることやピアスをしているとの共有があった。ピアスについて、声をかけたときに大きく反発することがなかったので話ができるんだという印象を持った。学習時の様子については、周囲の生徒の声かけもあり、思っていたよりも取り組んでいた。

佐賀 食べ物でなくそこに携わる人に対して考えるような場面はなかったのか。

報告者 自分自身にその観点がなかったので子どもたちも考えなかったと思う。

—報告5—③

「やさしい4年5組が大好きだよ。」

(熊本県人教)

—主な質疑と意見—

大阪 自分の価値観ばかりを子どもに伝える中で「先生に私の何がわかるん」と言われたことから自分自身の立ち位置を考えるようになったことが、報告者と重なった。「頑張ったしるし」ということを子どもとの出会いで振り返っていったが、もしも時が戻ったとして、その言葉で表現するか。

報告者 同じ言葉でもあの頃と今と意味が全く違う。今はすべてを受け入れた意味である。リンさんに対してとても自然にこの言葉が出たので呪文ではなく、自分の本当の気持ちであると思う。

奈良 隣保館学習の中でゆうさんが「自分のせいじゃないけん、そんなことされても何も言えない」と言った真意と、ゆうさんの変容を知りたい。また学習後に報告者自身が「本当に一緒にたたかう仲間になっているのか」と、自分に矢印を向けるってきっかけとなったことがあれば聞かせてほしい。

報告者 ゆうさんは「自分の責任ではないところで差別を受けることがあることはおかしい。それをされたらもう本当に何にもできないじゃないか」という意味で彼女は言った。隣保館で話を聞いて、「自分で何かしないと差別はなくなっていく」と変わっていった。「本当に一緒にたたかう仲間になっているのか」という問いについて、以前、自分の子どもと同じ病気の子どもの担任したときの経験がきっかけである。その子どもの母に対して「寄り添う」という言葉で逃げて、学校にあるその子どもにとっての困難に向き合わずたたかう仲間になっていなかった。隣保館の職員に「たたかう仲間が欲しい」と言われた時に「今の自分はどうか」と考えた。

熊本 報告者の同僚である。本校では学習の前に教員どうして自分自身の話をする。自分は自身のことを話すことが苦手だと思っていたが、報告者と話をし、教員自身が語らなければ子どもは自分

の話をしなないと気づけた。

兵庫 クラスの子どもたちが、そこにいてもいなくても互いのことを想像したり、共感したりする様子が見えた。学級経営で心掛けていることを聞かせてほしい。

報告者 この報告の頃、りんさんは教室に約1年間いなかった。でも登校していないけど、いるんだよということを自分自身も思っていたし、子どもたちへも伝えていた。またクラスの子へも、自分の子どもや家族のこと、自身のことをよく話している。

熊本 自分自身が差別をなくす生き方や差別をなくす考えでいなければ、社会は変わっていかないのではないかと感じている。報告に子どもたちの綴りの中に、自分が差別をなくしたいということがおそらくあったと思う。とてもすごいことだと感じた。人権学習をとおして子どもたちのどんな姿をめざしたのか教えてほしい。

熊本 自校の隣保館学習について、4月の初めに支部長から町のすべての小中学校の職員に向けて話をしてもらう。その後、各校で教員どうして自分のことを語り合う。そして子どもたちへも伝えていき、子どもも少しずつ悩んでいることも含め語りたいこと出せるようになるということをめざして進めている。そういったことが差別の解消につながっていくと思う。教育の責任は大きいので、私たちが日々差別をなくす生き方ができているのかを考えて、今私はどこに立っているのか、差別をなくす側に立っているのかを問うている。自然に立てていない時があるので、差別をしてしまっている自分があることも振り返りながら、そういうことも、子どもたちに伝えていながら、また一緒に子どもたちと差別をなくす仲間になっていきたいという思いで取り組んでいる。

愛媛 自分自身、発達障害があり、仕事をする中で他の先生たちのようにできないことがある。自身の障がいのことについて生徒に隠して関わっていたが、あるとき生徒たちに、そのことを伝えた。そうすると生徒が「実は私・・・」と話してくれて、その時に自分のことを話すことは本当に大切なんだと気づいた。子どもたちも実は自分が言えないことってというのがいっぱいあって、それを伝えたら・・・という恐れのお気持ちも多分あって悩んでるんじゃないかなと思う。自分のことを伝えるという報告にあるような実践を、私もしていきたいと思う。実際にあの私が伝えた時に、もう自分は隠さずに生きていきたいって言った生徒たちもいた。もちろん伝えるかどうかは自由だが、でも隠しても隠さなくてもいい、選べる社会であってほしいと思う。そういうことも生徒へ伝えていきたい。

Ⅲ 2日間の総括討論

兵庫 実践報告や会場から様々な話を聞くと、つくづく自分自身が子どもや保護者に支えられていると感じる。だから実践は自分のためにもなってい

ると感じる。社会に不安を感じる中、この場のように「たたかっている人がいる」「まともなことをやっている人がいる」と勇気が出る。この雰囲気大事にしたい。

佐賀 以前、ASDの子どもを特別支援学級で預かったことを思い出した。私自身が関わりにも悩んでいたが、ともに過ごす子どもたちが「こんなふうに伝えなあかんよ」等教えてくれる。一緒に生活する、一緒にいることで、子どもたちは育つ。その子も周りの子もなんか一緒にするっていうのを少しずつ感じた。また、今回は以前の同僚たちとともに来ている。話題に上がっていた「自分を語る」をとおしてつながった仲間である。大人がつながり、子どももつながっていくと思う。

大分 尊敬する先輩教員がよく生徒に「自分ならどうしたいの？」と問いかけていたことが印象に残っている。「寄り添う」という言葉が出ていたが、ただ聞いているだけで終わっていないか、自分に問い直した。自己決定につなげるため、仲間づくりも大切だと思う。誰かの話を受け止め、誰かに伝えるという関係性を作っていきたい。

兵庫 この分散会での話がALTが話してくれたこととつながり、考えたことが2つある。ひとつは「かわいそう」という言葉について。本校のALTはイスラム教徒で、そこに対する誤解や偏見について生徒に話をしてもらった。その中で断食の話があり「かわいそうでなく頑張ってるね」と言ってほしいということ伝えてくれた。生徒たちも私たちも、自分の見方とか価値観とかが全てではないなということ学んだ。もう一つは、ALTが育ったシンガポールは多文化共生の社会で、マンションのフロアにあえて様々な文化の人を住まわす。その中で違って当たり前で、相手を尊重し共に生きていくことを理解していくと話してくれた。その話とこの分散会での報告がつながった。違いで分けるのではなく、ともに過ごすことが大切で、子どもの中で子どもは育つし、大人も学ぶことを改めて感じた。しかし別でいることを望む人もいる。本人や保護者の思いをしっかり聞くことが私たちにできることかなと考えた。

佐賀 地元で起こった差別事象にふたをしているような状況がある。それが心を閉ざして、なにもないかのように学校に来る子どもの姿と重なる。子どもたちの心を開くには教員が語る、そして子どもが語り、つながっていく。その中で部落問題学習を行う。子どもの姿のない知識を入れるだけの学習という現実もある。なぜ部落問題学習を行うのか、今一度振り返りが必要と考える。

神奈川 神奈川でのこれまでの取組を振り返り、先ほども意見として出された「みんなで励まし合って、まっとうなことをやっつけていこう」と伝えていきたい。以前、勤務していた学校で、日本人生徒と外国人生徒のトラブルが起きた。そのときに自分は、外国人生徒にトラブルを繰り返さないように、被害にあわないように、食堂へ入ってはいけなと頼み、生徒

もそれを聞き入れた。緊急事態だったし良かれと
思っただけの判断だったが、やってはいけないことだ
ったと、最近やっと教員を終えて気づけるようにな
ってきた。自分の変わり目である。

大阪 障がいのある子どもに対して、困らないよ
うにしてあげると意識が自分の中にあり、他の
子からなんでその子ばかりなのかと言われ、自
身のしてあげるという価値観につながっていたん
だと問い直すことがあった。今回、子どもが社会で
どう生きていくかということを考えなければなら
ないと思った。みんなが納得できる結論に至るよ
う違ったら考え直し、そして進む、の繰り返しが大
事なんだと感じた。そんな集団づくりをしていき
たい。

熊本 小学生の時の部落差別との出会いからいろ
んなことを学んだり、活動をしたりしてきた。その
間、社会は変わったのだろうかと思う。では自分は
何をすれば変わるのか、そんなことを改めて感じる
ことができた。

石川 一緒にいることで一緒に育つという言葉が
あった。もちろん育つが、ただ入るだけでは育たな
いと強く実感している。例えばみんなと全く同じこ
とができないときに「しなくていいよ」と先生が言
ったりする。周りの子もあの子はいいんだと関係
が切れていく。とてももったいない。

神奈川 夜間中学に通う障がいのある生徒を志望
する高校の説明会へ一人で行かせた。それが失敗
だった。誤解から、入口あたりで高校の教員と少し
トラブルになったことで、説明会では「他の生徒と
一緒に仲良く勉強できるか」と聞かれた。結局進学
をあきらめた。ちょっとしたトラブルで仕事が続か
ない。可能性を拓げるためにも公の支援の場が必要
だと思う。

奈良 一緒にいるだけではダメだっていうのは自
分もそう思った。同じ教室にいて、もうそれでいけ
るじゃなくて、そうやって学校は受け入れたならそ
の子も一緒に学べるように、その子も一緒にでき
るようにどうすべきかということを考えないとい
けない。

大阪 子どもたちは、差別はいけないことだと分か
っているが行動が難しいと思っている。そこにどう
切り込むか、悩みながら実践を進めている。ひとり
では難しくても仲間と一緒にならできるかもしれな
いという展望を大切にしている。今回いろんな話
を聞く中で、自分自身を振り返ることの必要性を
改めて感じた。

福岡 繋がってというのはただそこにいただけじゃ
なくて作れるものじゃなくて、教師が意図として環
境を作っていく、出会う場合を作っていく、子ども
たちどうしをつないでいくということをしていき
たい。またそのためには、教員の人権感覚が重要で
ある。そういったことが自分に求められているのか
と思う。

熊本 報告者の頑張りを聞き、先生とともに自分に
できることは、学校づくりや組織づくり、外との連

携なのかなと考えた。2 日間の学びを学校に持ち
帰り発信していく。

まとめ

次のことを確認し、参加した一人ひとりが明日から
それぞれの立場で差別解消に向けて動き出すこと
を宣言し、まとめとした。

- ・社会にあるつくられた差別をなくしていくのは私
たち一人ひとりであること
- ・ともに学びともに育つとはどういうことなのか考
え続けること
- ・配慮が排除になっていないか問うこと
- ・自分を語り誰かとつながること
- ・自身の差別心への気づき、そして問い続けること
- ・子どもの姿のある部落問題学習を創ること